

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 30号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十六年六月
第三十号

< 2014年 6月 >

古賀 順子

バレエ「白鳥の湖」

初夏を告げるローラン・ガロスが始まり、エッフェル塔には、応援の大きなテニスボールが飾られました。そのエッフェル塔を見下ろすシヤイヨ劇場で、ジャン＝クリストフ・マイヨ(1960年トゥール生まれ)率いるモンテカルロ・バレエ団のパリ公演が行なわれています。モナコに本拠地を置き、クラシック・バレエの見直しを続けているマイヨの「湖(Lac)」(2011年)です。

「白鳥の湖」は、チャイコフスキー(1840-1893)最初のバレエ曲ですが、1877年ボリショイ劇場での初演は不評でした。娯楽性を重視し、チャイコフスキーの交響曲を理解できなかった当時の振付師ユリウス・ライシンガーに力量がなく、バレエとしては失敗に終わっています。「白鳥の湖」がバレエ中のバレエに変身するのは、マルセイユ生まれで、マリンスキー劇場に招聘され、以後ロシアで生涯を終えるマリウス・プティパ(1818-1910)のお陰です。振付けを変え、複雑なあらすじを訂正し、チャイコフスキーが93年冬コレラで亡くなるまで、曲も一部改訂されました。翌94年3月マリンスキー劇場で作曲家の追悼公演として、完成していた第二幕が演じられ大成功を収め、それ以後クラシック・バレエの代名詞となります。

ヨーロッパ文化の中で、白鳥は人間に近い存在として、特別の意味を持っています。ギリシア神話では、スパルタ王テンダルの妃レダに心を奪われたゼウス神が、白鳥の姿に変身し、レダを誘惑します。一見すると優雅で汚れのない白鳥ですが、その無垢な姿は清らかな精神と同時に、その美しい翼に隠された肉体的誘惑を暗示します。ドイツ民話に着想を得たバレエ「白鳥の湖」も、相反する二面性を象徴する白鳥を表現しています。白鳥と黒鳥、ジークフリード

王子の誕生日を祝う宮殿と白鳥のいる湖、昼と夜、善と悪、光と闇、人間と獣、現実と夢など、様々な二律背反の上に成り立つ物語です。

パリ・オペラ座のレパートリー「白鳥」は、プティパとその弟子イヴァノフ版をもとに、ヌレーエフが振付けました。白鳥と黒鳥は一人のバレリーナが踊り、オデットとオディールに翻弄されるジークフリードは、ロマン派的な主人公と化しています。難しい高度なテクニックと細かくコード化された繊細で優雅な動きは、芸術的な洗練度において、クラシックの頂点と言えます。プティパ・ヌレーエフ版の「白鳥」をいかに超えるかは、その後の振付師にとって、簡単なことではありません。ジョン・ノイマイヤー、ローラン・プティ、マック・エツを始め、1995年ロンドンで初演されたマチュー・ボーン「スワン・レイク」は、新たな解釈と言えます。男性バレエダンサーによる白鳥たちは、ギリシア神話以来続いてきた白鳥の両性具有、静と動、翼に隠れた肉体的美しさのイメージを具現化しています。プティパ、ヌレーエフの「白鳥」が女性的で洗練されたバレエだとすれば、その厳格な形式や枠を越えて、独自性を求めるマチュー・ボーンの「白鳥」たちは、夜の湖、地殻から発する力強さと躍動感、男性的で野生の迫力があります。闇も光と同じく魅力的で、二律背反する世界の狭間で悩み、苦しみ、翻弄されながらも、力強く飛び立つ白鳥の躍動感こそが、ヌレーエフ以後の振付の魅力だと思います。

ジャン＝クリストフ・マイヨの「湖」は、対立が図式的に分かり易く構成されています。休憩も含め、前後二幕、二時間です。王と妃に護られ、恋を夢見る王子が、明るい宮殿を舞台に色とりどりの花嫁候補と踊ります。後半の夜の部分は、衣装も白と黒だけで、白鳥と黒鳥は二人に振り分けられています。マイヨの白鳥たちは女性ですが、夜の闇で、黒の誘惑と闘う攻撃的な群舞の力強さが感動的です。また、妃役を踊る小池ミモザの存在も嬉しい舞台です。

ギュスターヴ・モロー「レダと白鳥」

